

幕末の政局における薩摩藩家老の動向について

—慶応期の桂久武と島津広兼を中心に—

市村 哲 二

はじめに

本稿は、薩摩藩が藩の方針を抗幕志向へ移行した事をより鮮明に打ち出した時期（慶応元（一八六五）年）から、慶応四（一八六八）年の戊辰戦争開戦までの政局における藩家老の動向を分析したものである。

従来、慶応期については、薩摩・長州の両藩が連携を深めながら武力倒幕の動きを推進したとする見方の下で政治過程の研究がなされてきた。その中でも、薩摩藩の政治活動については、対幕強硬派とされた西郷隆盛や大久保利通らの動向を中心に捉える見方が主流であり、京都における実質的な最高責任者であった小松帯刀や、国元のまとめ役的立場であった桂久武らを含めた家老達の動向が西郷・大久保と一括りにされてきた感がある。^①しかし近年、武力倒幕方針を巡る薩摩藩内反対派の動向の分析が進み、西郷・大久保らの武力倒幕計画は京都薩摩藩邸内及び国元でもかなり危険視されており、必ずしも藩全体が完全の一つの方向に進んでいた訳ではない事が分かってきた。^②

以上のような先行研究の状況を踏まえ、今回、黎明館が寄託を受けて保管している「桂家史料」の中の島津広兼が桂久武に送った書翰^③及びその他の既知の史料等の再読を通して、この二人の家老の政治的意図や活動を分析しつつ、慶応期の政局における薩摩藩家老の動向について鳥瞰し、考察していく事を試みた。

そして、本稿で特に重点的に取り扱うこの二人の人物についてであるが、まず、家柄及び職歴等で何点か共通点が見られる事に触れておきたい。

久武は、天保元（一八三〇）年に日置領主島津久風の五男として鹿児島城下で生まれ、安政二（一八五五）年に桂久武の養子となり、その後、詰衆・造士館掛・演武館掛・大島守衛方・大目付・御勝手方掛などを経て、慶応元年九月、正式に家老職に就任した。^④よく知られているように、西郷隆盛とは西郷の父吉兵衛が日置島津家の家政を取り扱う「用頼み」となっていた事から、幼少の頃からの旧知の仲である。

一方、広兼（島津伊勢、諏訪甚六）は、文政十二（一八二九）年に他家ながら島津号を許された諏訪家の嫡子として鹿児島城下で生まれ、弘化四（一八四七）年に当番頭兼奏者番となって以来、藩の様々な要職に就いた。文久二（一八六二）年に譴責を受けて謹慎を命じられるが、^⑤同三年の薩英戦争へ出陣後に復帰が認められ、慶応元年に家老職に昇進した。

両者は年齢も近く、共に一所持の家柄であり、同年に家老職に就任した事などから、割と頻繁に連絡を取り合う関係であった様である。そして、慶応二（一八六六）年一月には共に京都に滞在して薩長同盟締結（本稿では一般に広く認知されている「同盟」の語句を使用する。）に関わり、慶応三（一八六七）年末には久武は国元、広兼は京都においてそれぞれ政局に関与しながら連絡を行っていた様子が「桂家史料」内の書翰等から読み取れる。

本稿では、このような史料等からこの二人を含めた藩の家老達が慶応期の武力倒幕に向けた藩の動きにどのように関わっていたかを、順を追って明らかにしながら論を進めていきたいと考える。

それではまず、その手始めとして、慶応元年の二人のやり取り等を通しながら

ら、当該期の政治状況及び両者の動向について概観していく事にしたい。

一 慶応元年の政局における久武と広兼の動向

元治元（一八六四）年の参予会議崩壊、禁門の変、第一次長州征討等を通して、薩摩藩は一橋慶喜や幕府に対して徐々に不信感を強め、翌慶応元年になると藩の方針が抗幕志向に移行した事がより明確になり始めた。長州征討後に幕府が次の標的を薩摩にするのでは、との情報等から危機感を募らせた藩の最高権力者の島津久光が貿易振興・軍制改革による武備強化に舵を切り始め、藩全体が富国強兵路線と割拠体制の構築に邁進し始める。慶応元年五月二十四日付の久武宛広兼書翰（以下、書翰と略す）には次のような記載が見られる。

（前略）於其御地盛大訓練沙汰御手も相付候由、不跡返様くれ〜も奉折候、（中略）御先代様御善政ニ被復難有次第第二御座候、小松家西郷氏之間、老なり共早々上京之処御都合宜敷御取計被下度御頼申上候、（後略）

この書翰からは、当時、京都に滞在中の広兼が、国元で盛んに軍事訓練が行われている事を知り、先代（薩摩藩第十一代藩主島津斉彬）の軍制復活について好意的に受け止めた感想を久武に伝えている事が分かる。広兼は、小松か西郷どちらかの早々の上京を求めており、おそらくこの軍制復活には国元に滞在していた両者や久武も関わっていた事が推測される。また、同年閏五月十五日付の書翰では、以下のような記載がある。

（前略）関東暴威被張候模様ニ而ハ、自来割拠之形勢も難量事候間、能々富国強兵之道相立候様諸事御評議之処くれ〜も奉折候、爰元三井方繰替銭之一条殊之外能運ニ相成、其段ハ先便申上越通随分御為筋可相成哉、（後略）

同年五月十六日、十四代将軍徳川家茂が長州再征のため江戸を出発し、閏五月二十二日に入京・参内する事で幕府が威権高揚を図る中、広兼は京都におい

て時勢を觀望していた。そして、国元での割拠体制構築と富国強兵路線の推進が進展するように祈念し、その実現に向けて財政基盤を安定させるために豪商三井家との交渉を藩の在京家老として担っている状況が窺える。

更に、同年六月二十八日付の書翰には外城衆中の軍制に関する記載がある。

（前略）於御国許品々御手も相付外城衆中喫役抔旧政ニ被為復、追々士氣も相振候様成立可申、其外富国強兵之道専務と別而御尽力之由、御同席中至極御和順ニ而毎物御評決相成候段も致承知、何より先結構之至、（後略）

右の書翰からは、国元において外城衆中の軍制が旧制に復された事（居地頭制の復活）を契機として、郷士の士気が高まっていく状況を広兼が期待し、富国強兵路線の一層の推進を願っている様子が分かる。久武は、後にこの政策に触れた書翰を小松に送っており、関与があった事は明らかである。

また、同年、留学生を率いて渡英した新納久脩（翌年、家老となる）が英国から久武や西郷、大久保、久光側近の蓑田伝兵衛らに宛てて出した七月二十七日付の書翰には、購入の交渉を窺わせる軍艦の凶面も含まれていた。当資料などからも薩摩藩の富国強兵路線の推進に家老クラスの人物が深く関わっていた事が見えてくる。

以上のような事例から、慶応元年以降、様々な分野で藩の軍備強化に向けて家老達（もしくはそれに準ずる人物）が関わっていた状況が分かり、その貢献度も次第に大きくなっていった事が予想される。

続いて、慶応元年後半期の政治状況についてであるが、征長問題等について広兼は同年九月二十三日付の書翰において、以下のよう久武に伝えている。

（前略）大樹公再上洛去ル廿一日御参内征長之朝命申請之候由、さて〜浅間敷歎ケ敷次第、朝威も是切歎と参内前以大久保諸所江参殿頼ニ致周旋候得共、何も不詮立（中略）又異船撰海江渡来趣意いまだ不相分候得共、

兵庫開湊一条歎とも被察申候、（中略）江戸表勤番人数引取之儀御留守居新納嘉藤二より吟味之趣、岩下氏抔江申遣於爰元及評議候処、当分格別御

用も無之尤二被相問候付、伺之上何分可取計筈御座候得共、片時も早く此機会不取失儀專要之事候間、(後略)

書翰ではまず、大久保の周旋尽力もかなわず同年九月二十一日に長州再征の勅許が降りた事を嘆くと共に、英仏米蘭の四国艦隊が兵庫に來航した目的(条約勅許・兵庫先期開港要求など)について、その内容を推察しつつ伝えている。そして、同年末に問題が生じる江戸薩摩藩邸の人員削減に関しては、江戸留守居役の新納嘉藤二や岩下方平らから報告を得た広兼が積極的に賛同している様子が窺え、中々興味深い。割拠体制構築に向けて出費が増大する中で、この年の九月頃から藩内では経費削減のために江戸藩邸の人員削減を実施すべきとの意見が強まっていた。特に西郷が強く主張した事に対して久光が不快感を強め、両者間の関係に微妙な軋轢を生じさせていくが、この件については後程改めて検討していきたい。

次の同年十一月十一日付の書翰では、広兼が当時の状況等を更に具体的に久武に報告している。

(前略)長州諸所攻口更ニ於浪花御達相成候得共、名計之事ニハ相違有之間敷候間、決而御国許御動揺有之間敷奉存候、(中略)爰元琉宝通用之儀殊之外能運ニ相成、是以市来より御聞取為相成筈、丹波邊糸御買入大津驛江も琉宝開立候模様、当分手付方最中と被問申候、(中略)大嶋白糖ハ何様之事ニ御座候哉、何分御国産十分致生産御新借も無滞御返滞濟、富国之道一涯相立候様有之候得」と奉折候、(中略)御上京被仰出候付而者其元御共願人等ニハ御心配之程嘸哉と致想像候、当地邸中多人数相成賑々敷罷成申候、(後略)

報告は大きく二点に亘るが、まず国元で最も懸念されているであろう長州征討問題について、例えば大坂で命令があってもそれは名ばかりのもので、国元で動揺する必要はないと伝えている。おそらく広兼は、幕府の現状を鑑みて実際の出兵はあり得ないと判断していたと思われる、これが後の薩長同盟締結の際に

も薩摩藩の基本的な考え方として話し合いの前提となる。次に、琉球通宝の流通状況についての報告であるが、詳細は市来六左衛門に委ねているものの、丹波での生糸の買入れ時や大津での使用が首尾良く行われている事について触れており、国元を安心させている。続いて、奄美大島における白糖生産の進捗状況については、逆に広兼が久武に尋ねている。当時、薩摩藩は英国などから白糖製造機械を購入し、製糖指導のために英国人ウォートルスを雇用して工場建設に着手しようとしていた。質の点で輸入品に張り合うのは困難であった様であるが、書翰の文面からは広兼が自藩の経済政策の進展を強く意識している様子が窺え、この分野の成功によって富国の道が成り立つ事を強く祈念している心境が分かる(結果的にこの事業は、明治二(一八六九)年頃に不採算のため中止され、機械等は売却された)。そして本書翰の後半部からは、久武が上京を命じられた事で再会を心待ちにしている広兼の心情が読み取れるが、この上京については久光の名代として天皇の御見舞(天機伺い)を行う事が主目的とされてきた。しかし近年の研究では、それ以外の目的について、深く掘り下げる内容の論考が出されている。本稿でもこの問題に触れていくが、その前に先述した江戸藩邸の人員削減問題について、書翰等から再度検討していく事にしたい。

慶応元年十一月十九日、江戸渋谷の薩摩藩邸大奥が経費削減を目的に引き払われるが、同年十二月六日付で西郷が久光側近の蓑田伝兵衛に宛てた書翰には次のような記載が見られる。

(前略)陳れば江戸表御役所等引き払いの一条、御尊論の如く政府より表通り御問い越し相成り候趣、此の一条に付いては、専ら私主張いたし候訳にて御座候、(後略)

この書翰の中で西郷は、江戸の薩摩藩邸における多くの役人や奥女中の帰国を強く主張しており、西郷の並々ならぬ決意が感じられるが、その一方で、久光にはこれが西郷の幕府を度外視した独断専行に見えた様である。そして、こ

の書翰と同一の日付で広兼が久武に書翰を送っている、やや長文であるがその一部を紹介したい。

(前略) 今日一橋邸より小松家江御談合之儀有之候付、参邸可有之昨日原方より申来候付形業ハ小松家より被申越候而可有之、江戸表引払之儀余り断然過候との思召之由何とも奉恐入候次第御座候、乍併親藩之内ニも事早々引払候藩々も有之候との趣も相聞得、当分之処ニ而ハ京師関東と両所江御手於広ヶさせられ候而者御国力迎も応シ候丈ニ無之、京師(江戸)一邸ニ而さへ過分之御入償、当世態ニ而者江戸表之儀者御留守居方一局ニ而可相済との評議ニ而、機会於不失勤番人数ハ都而上京申越置候折柄、小松家杯も帰京有之御広敷向引払之儀者先々より之御趣意之段も承候付申談候、堀直太郎出府被仰付都合能天璋院様御方も御聞済相成候趣共い細上村休助相含居候付、細詳御聞取可被下候、兎角幕府之政令も是迄通ニ而ハ相治里申間敷不相済、天下之明賢侯於被召候土屹者御立替不相成候而者治り申間敷、何分富国強兵之道ハ根於強して枝葉被為省候処第一歟と相考取計置候儀ニ御座候、尤江戸勤番引取評議之人數者於爰元段々有之候へ共、突留取極候儀ハ拙者老人ニ而御座候間、若哉思召ニ不被為叶譯聊も有之候ハ、余人江ハとふそ不相掛様御取計被下度分而御頼申上候、(後略)

書翰の中で広兼は、江戸藩邸人員削減の一件で一橋家サイドから家老の小松に對して横やりが入ったが、天璋院も了承済の事であり、幕府に氣遣いせず富国強兵路線を推進すべきであると久武に伝えている。また、後半の文面中に、「突留取極候儀ハ拙者老人ニ而御座候」との記載が見られ、この件に関して家老としての責務を果たそうとする広兼の断固たる決意が読み取れる。確かに先述した通り、この問題の解決に積極的に関わったのは西郷であるが、最終的に責任を取るべき立場であったのは家老達(特にこの場合は、在京家老として西郷の側にいた広兼や小松)である。広兼はおそらくその覚悟を同じ立場である国元の久武に伝えたかったのではあるまいか。また、当時久光は盟友である前

宇和島藩主の伊達宗城から、西郷を中心とした一派が幕府に對して強硬的な姿勢に変わりつつあるとの情報を得ており、西郷に對する不信任感を徐々に高めていたと予想されるが、それによる両者間の関係悪化が久光の側にいた久武には大きな懸念材料であったと思われる。その空気を敏感に感じ取った広兼が、幕府に對する強硬路線を突き進もうとしていた西郷の姿勢を案じ、西郷と旧知の仲である久武にこのような伝え方をしたとも考えられる。

以上のような状況の中で、久光名代として天機伺いのために上京を命じられた久武が、在京中の広兼や西郷と面会し、慶応元年末から二年始めにかけての中央政局に大きく関与していくが、この内容に關しては次章で検討する。

二 薩長同盟締結時における久武と広兼

慶応元年十二月六日、久武は鹿児島前之浜を出帆し上京の途に付くが、この上京の経緯等を詳細な日記(慶応元年乙丑十二月六日ヨ里 上京日記)、以下「上京日記」と記載)に書き記している。これまで当史料は、薩長同盟締結の日時等を検討する際の重要史料として主に扱われてきた。本稿においては久武の上京経過や在京期間の主要な活動内容を「上京日記」の記載から追いつつ、当時の中央政局における久武と広兼の動向を他史料とも合わせながら捉えていく事としたい。また、その意義について様々な議論が続けられている薩長同盟についても再度、検討を試みていきたいと考える。

まず、久武上京の旅程であるが、鹿児島を出帆した後の次の行き先は長崎であった。同行したのは、久光二男の久治、四男の珍彦、家老の岩下方平、藩士の伊地知壯之丞、吉井友実らであり、この時点で家老の岩下が久武と行動を共にしていた事に着目しておきたい。そして、同月七日の午後に長崎に着船後、八日に長崎英国領事館士官のジョン・ラウダ、蘭国貿易会社社員のアルベルト・J・ボードインらを訪問し、九日には英国軍艦の見学、ドック造建場所の

見分を行った。この時の状況に関する「上京日記」の記載は以下の通りである。

一 軍艦より帰り掛下ツク造建場所致見分くれ候様承候付参候処、通事岩瀬参居、致案内、相応之場所ニて取置候事、(後略)

ドックとは、薩摩藩が建設を計画していた小菅修船場(通称ソロバンドック)の事である。この建設を決めたのは、おそらく小松と思われるが、建設予定地を最終的に判断したのは、「上京日記」の記載から久武であると推察される。⁽⁸⁾

続いて十日には、上野彦馬の写真館で撮影後に長崎製鉄所を見学し、十一日には英国商人のグラバー邸にて岩下らも同席の下、英国領事ガチル(エージー・ガール)やグラバーらと国事について議論をしている。この席上で久武と岩下は先述した英仏米蘭の四国艦隊の兵庫沖来航の際に、英国が薩摩藩に抱いた誤解(薩摩藩が条約勅許に反対している)について領事等に釈明をし、英国側の了解を得る事ができた。⁽⁹⁾ その結果が後に、翌年の英国公使パークスの鹿児島訪問へと繋がっていくが、岩下の主目的が江戸でパークスに弁明する事であったため、先んじて長崎で久武と家老二人の連携によって釈明が出来たのは丁度良いタイミングであったと思われる。英国との関係修復に向けて、この時に二人の家老が長崎で果たした役割は重要な意味を持つものであったと言える。

その後、十二日に長崎を出帆、十三日には上之関に到着して坂本龍馬と会う約束であったが会えずに帰船した、とある。この時に久武がどのような趣旨で龍馬と会おうとしていたかについては明確な記載がないが、時期的に見てユニオン号事件⁽²⁰⁾に関する事であったとも考えられる。そして、十四日上之関を出帆し十六日に大坂着、大坂薩摩藩邸留守居役の木場伝内らの歓待を受けて十八日に大坂を出発、同日に伏見に着いて西郷や小松、大久保らが出迎えた。ただし「上京日記」には、実際に久武が旧友の西郷と十分に話が出来たのは翌十九日であったとの記載があり、その部分を以下に引用する。

同(十二月)十九日 雪少々降積

一 此曉西郷吉之助見舞ニてゆるく相咄候、御国許之事情、其外御内諭之趣共得と及談合候処、能々合点有之候間、至て仕合二候、(後略)

久武は「上京日記」の中で、十九日の早朝、西郷に対し国元で命じられた「御内諭」を伝えたと、西郷が承諾したので安心できた事を記しており、また、その後に入京して「伊勢殿より両種并茶道具頂候」の記載がある事から、同日、広兼とも面会したかと思われる。

それでは、久武が西郷に伝えた「御内諭」についてであるが、二十日の日記には次のような記載がある。

一 四ツ時分より御屋敷御殿江出勤、御国許より被仰付候趣共大略申述候、(中略) 伊勢殿ニハ病氣故出勤も無之、尤相応之煩故、病床江踏込逢取候、(後略)

久武は、午前十時頃に藩邸に出勤し、国元から命じられた内容(前日に西郷へ伝えた内容とほぼ同様のもので考えられる)を在京藩士に伝え、更に当日、体調不良で欠勤していた広兼の元をわざわざ訪ねて話をしている事が分かる。

では、久武が広兼の病床に踏み込んでまで急いで伝えた内容とは一体どのようなものであったのか。それはおそらく久光から命じられた、西郷を中心とする在京藩士の対幕強硬路線の阻止⁽²¹⁾に関する事であったと推測される。

先述した様に、国元の久光は江戸薩摩藩邸の引き払い問題等を含めた西郷ら在京藩士の対幕強硬路線を危険視していた。そこで、自分の名代として天機伺いのために上京する家老の久武に「御内諭」(対幕強硬路線の阻止)を託し、西郷と旧知の仲である久武が自分の意を汲みつつ命令を忠実に実行し、その後は西郷を連れて共に帰国する事を望んでいたのではないだろうか。

そして、久武は久光の「御内諭」が西郷だけでなく主なる在京藩士達に首尾良く伝えられた事を、同じ立場の家老である広兼に一刻も早く報せて共通理解を図り、安心したかったものと推察される。久光と西郷両者の関係を懸念してい

たであろう久武にとっては、それだけこの任務が大きな重圧と感じられていたものと捉える事が出来よう。

このように、上京してすぐに重要任務を果たした久武であるが、その後の動向（天機伺い前後）について、「上京日記」の記載から引き続き検討していきたい。

久武はまず二十六日にその下準備として二条家、野宮家、飛鳥井家等の公卿衆を訪問し、二十七日の出勤途中で広兼と面会し話をしている。そして、二十八日の午前八時頃に初めて宮中に参内し、久光の名代として御書付を渡し、御勅答を拝受する手筈となった。その日の午前十時過ぎに藩邸に出勤したところ、病気で休んでいた筈の広兼が出動していたため運良く話ができ、更にその後には広兼が久武の宿に來訪し、再び話をした様である。

この一連の流れから、久武は今回の上京の主目的とされた天機伺いの前後に広兼と何度も面会している事が分かり、家老同士の綿密な事前確認や事後報告が行われた状況が考えられる。この天機伺いに関しては、これまでの研究であまり大きく取り上げられる機会はなかったが、藩を代表する立場であった家老達にとっては、重要な意味を持つものであった事を再認識すべきである。

以上の様に、慶応元年の年末は天機伺いが久武にとっての主要な任務であったが、明くる慶応二（一八六六）年になるとすぐに久武は、中央政局における最重要課題（対長州問題）に必然的に関わっていく。その事に関する「上京日記」の記載を、以下、引用してみたい。

正月八日 朝立曇夕より雨此晩頻ニ降る

一 毎之通寢覚、每刻之通出勤、此日諏訪家出勤也、小松家狩立之由也、此日黒田了助（清隆）長より帰り、木戸某同伴、伏見迄参候由にて西郷江参呉候様申来、只今より参るとて御屋敷内にて行違候て別れ候、此晚諏訪氏江ゆるゆる咄ニ参候様承候、（後略）

慶応元年十二月二十八日、長州藩の木戸孝允は同藩士の品川弥二郎らを伴い、

西郷配下の黒田清隆と京都に向けて出発し、翌慶応二年一月七日に大坂に到着した。日記の記載からは、西郷が木戸ら一行の大坂到着の翌日に黒田から乞われて伏見に出迎えに行く様子や、京都における筆頭家老の小松が不在のため、当日出勤していた広兼へその日の晩に報告、相談する予定であると久武に伝えられている事が分かる。

さて、ここで留意したいのが、木戸の上京及びその日程が、果たして薩摩側にとつて既定の事であったか、という点である。日記からは、西郷が慌ただしく出迎えに行く様子が窺え、また、小松が狩立のために不在であるなど、まるで薩摩藩側が事前に訪問を察知していなかった様な状況が想像できる。

これまで筆者は、木戸の上京が先述したユニオン号事件の解決等を目的として、薩摩藩（西郷）が黒田を使いとして長州に派遣し、木戸を上京させたとする見方をしてきたが、近年は西郷が望んだ事ではなく、黒田の独断専行気味の要請であったとする説にも同調している⁽²³⁾。この問題については慎重な検討を要すると考えるが、薩摩藩は当時、長州藩を「抗幕」のためのパートナーとして意識しつつあり⁽²⁴⁾、例え突発的であったとしても、長州藩の対外的代表である木戸の上京は、まさに「渡りに船」であったと推察される。ただし、薩摩藩側としてはあくまでも久光の意向から逸脱しない範囲内での連携関係構築を志向していた事は念頭に置いておく必要がある。それでは、その後の久武らの動向について同月十二日及び十四日の「上京日記」の記載から、追って見ていく事したい。

正月十二日 曇晴雪少々降ル也、

一 毎之通寢覚也、此日休日故出勤不致候、四ツ後帯刀殿・西郷同伴にて見舞也、長の木戸某より箱入付鐔大小御贈候由にて西郷氏持参也、（後略）

正月十四日 雨天

一 毎之通寢覚、四ツ時分より小松家江参、ゆるく相咄、木戸某江初

て逢ひ致挨拶候、夫より帰り二御屋敷江参、出殿いたし候処、最早

退出後二相成、諏訪家江参、暫時相咄、夫より西郷氏江参る、黒田嘉右衛門帰候由にて参居候間、暫時相咄候、夫より帰宿、七ツ過願訪氏見舞、海江田・奈良原二も同断、暫時にて皆被帰候、(後略)

一月十二日、休日のため出勤せずにいた久武の元を午前十一時頃に小松が西郷と共に来訪し、木戸から贈られた箱入り大小鐙を手渡した、とある。おそらく木戸は、久武を薩摩藩内における重要人物の一人として捉え、鐙を贈ったと考えられる。久武は、その二日後の十四日に小松同席の下、木戸と初めて面会し話をしている。その日、藩邸に出勤したが、主立った藩士が不在であったため退出し、広兼の元を訪れて暫く話をした後、西郷を訪問すると黒田嘉右衛門もいたので、暫く話をして帰宿した。ただ、ここで気になるのが、同日の午後四時過ぎに広兼が久武を訪問し、再び話をしている事である。この時に広兼は、海江田信義と奈良原繁を同行していた。この二名であるが、兩名共に久光に近い側の立場であり、特に奈良原は文久二(一八六二)年の寺田屋事件の際に大山綱良らと共に鎮撫使として久光の命令を忠実に実行した、いわば武闘派的な人物である。奈良原たちが広兼に同行して久武の元を訪れたのは、木戸の上京を知った彼等が木戸と対幕強硬派の西郷らとの会談を懸念し、久光の「御内諭」からの逸脱がないように、久武に念押しをするためであったとも考えられそうである。そのような状況の中で、久武が木戸と面会后に広兼と再度に亘り話した内容は、今後の木戸との交渉内容(後述)に関する具体的な手立てであったのではないだろうか。では、その後の薩摩藩側と木戸との交渉の経緯であるが、同月十七日の「上京日記」には、次のような記載が見られる。

正月十七日 曇天

一 毎之通剋限寢覚也、此朝鎌田孝右衛門参、夕刻御国元より十二月廿九日急飛脚到着之由にて問合致持参候、我々共早目二罷下り候様との事二候、内田仲之助二も此度英夷より申出候諏二付、響合方も有

之候付、罷下候様との事、(後略)

「上京日記」の内容が一旦、木戸との交渉問題から離れて、前日の夕方に到着した国元からの急飛脚により、久武らに早めに国元に戻るようにとの指示があった様子が分かる。おそらく、「此度英夷より申出候諏(趣)二付」とある事から、薩摩藩が条約勅許に反対していると見られた件について、京都留守居役の内田仲之助(政風)らに英国側が説明を求めたからだと予想できる。先述したように、英国公使パークスの鹿児島訪問を画策していた薩摩藩にとっては、英国との関係修復は緊急の課題であり、一日でも早い久武らの帰国が望まれた筈である。

そして、帰国要請が届いた翌日の「上京日記」には、薩長同盟締結を考える上で非常に重要な会談が催されたと思定される記載があるので、以下に引用する。

正月十八日 曇

一 毎之通寢覚也、此日出勤不致、八ツ時分より小松家江、此日長の木戸江ゆるく取会度申入置候付、参候様にとの事故参候処、皆く大かね時分被参候、伊勢殿・西郷・大久保・吉井・奈良原也、深更迄相咄、国事段々咄合候事、

一月十八日、(薩摩藩側が)木戸にゆっくり面会したいと申し出ていたところ、小松から準備が整ったとの連絡があり、小松邸(近衛家別邸御花畑)に久武、広兼、西郷、大久保、奈良原ら薩摩藩重役が集まり、国事について夜遅くまで話し合った、とある。その会談の内容については、『吉川経幹周旋記』を題材に検討された先行研究⁽²⁶⁾によってほぼ明らかになっているため、それを基に要点を整理していきたい。まず薩摩藩側の主張であるが、様々な情報収集による状況判断から先述した様に幕府の長州への実際の出兵はあり得ないと考えており、まずは形だけでも幕府の処分案を受け入れる様に勧め、その間に朝廷や幕府の周旋に尽力するとの方針を提示した。それに対し木戸は、第一次

長州征討の後に長州藩側は三家老の切腹で幕府に対して謝罪済みであるとして、改めて提示された処分案（藩主親子の蟄居及び所領十萬石の削減）を受諾する事は出来ず、いざとなれば戦争も辞さないとの姿勢を明確に打ち出した。その結果、会談は平行線を辿ったが、最終的な確認の場において薩摩藩側が木戸の主張を受け入れる形で六ヶ条にわたる両藩の同盟が締結されたという見方がほぼ定説化している。

近年、この会談の内容に関する新史料が発見された事で、これまでの見方を補強する事が可能となった。この新史料とは、鳥取藩の京都・大坂留守居役から国元に送られた報告書の控えであり、一般に「京坂書通写（慶応二年丙寅正月より）」と呼ばれているものである。⁽²⁸⁾以下、当該史料において特に同盟の内容に関わる重要部分を引用しながら、同盟が目指した真の狙いなどについて再検討を試みてみたい。

（前略）只今迄長人え掛合等之書面段々有之、此度寛大之御処置二相成り候共決而御請は致間敷、却而歎願二托し多人数上京致候様は、其節は急度相話し会を迫退事之周旋は可致と長人え之返書等も所持致し居申趣、（後略）

慶応二年二月七日付の内容は主に寺田屋事件について触れられており、土佐の脱藩浪士である坂本龍馬が薩摩藩の庇護の下、長州藩に出入りをしている人物とされ、寺田屋で幕吏の襲撃を受けた様子等が報告されている。そして、その報告の中には龍馬が所持していたとされる薩長の会談内容に関する書面が寺田屋に残されていたとの記載が見られる。その書面には、例え幕府から長州藩に対して「寛大之御処置」が出たとしても決して受諾するはずがなく、逆に長州藩が朝敵からの回復を歎願するために率兵東上した場合には薩摩藩が会津藩を追い払う事に協力するという内容が記されていた。これは、先述した六ヶ条の内の第五条（「兵士をも上国之上、橋会桑等も如只今次第二而、勿体なくも朝廷を擁し奉り、正義を拒ミ、周旋尽力之道を相遮り候ときハ、終に及決戦

候外無之との事⁽²⁹⁾」に関連してくる重要な部分であり、新史料によって第五条の内容がこれまで以上に明確になったと言える。更に、この情報が幕府側に掴まれていた意味は、幕府の薩摩藩に対する警戒心を高める上で非常に大きかったと考える。ただし、第五条の「決戦」の語句の捉え方については、西郷の木戸に対するリップサービスの要素が強い事も見受けられ、⁽³⁰⁾実際に薩摩藩側としては同盟の他の条項に述べられているように、あくまでも長州藩の冤罪を濯ぐための周旋に尽力するものであり、実際の戦闘は想定していなかったとする見方もある。

一方で、西郷の内意（京都での挙兵により、一会桑勢力を打倒する）が黒田を通じて中津川の国学者に伝わっている状況などから、薩摩の目的は内戦回避や長州に幕府の条件を承諾させるといったものではなく、一会桑を目標とした明白な攻守同盟・軍事同盟とする見解がある。⁽³¹⁾

西郷にとって長州との同盟は、表向きには薩摩藩の既定路線（有事の際の禁裏守衛など）の延長線上の内容及び雪冤への協力、後方支援であり、この点に関して言えば久光の意向から逸脱する事はなかった。久光は文久期以来、常に国内対立の回避を志向しており、そのために対幕強硬派と目されていた西郷の行動を常に監視する事を怠らなかつた。西郷と旧知の仲である久光を上京させて内意を伝え、更に会談に奈良原を同席させたのは、その顕著な例である。

しかし、強硬派の西郷としては一会桑勢力を打倒する事で中央政局における主導権を奪取したいとの強い思惑があったため、それが自然と部下の黒田に受け止められて、先述したように外部にも伝わる状況になったと思われる。つまり、情勢によっては薩摩藩が戦闘に介入する事も十分あり得たと推察でき、そうなるも当然、西郷が久光の意向から逸脱して再び遠島処分等の処罰を受ける可能性もあった訳である。

このような危険な状況を踏まえて、同盟締結にあたり久光の意に沿えるように最終的な決断・調整・報告を行ったのは、小松を中心とした家老達（久武、

広兼ら)であったと考えられる。特に久武、広兼は、これまでの経緯(江戸藩邸引き払い問題を含めた西郷の幕府に対する強硬的な姿勢への変化など)から西郷の「勇み足」を強く懸念していた筈である。それでは実際に、同盟締結前後の久武の「上京日記」の記載から、家老達がとった具体的な行動について見ていきたい。

正月廿日 曇天

一 四ツ後出勤、此日御国元江大久保罷下候て爰許之事情言上仕候ハ可然哉ニ申談、廿一日出立申渡相成候事、

一 八ツ時分帰宅、昼飯相仕舞候て大久保江御国元江之言上之趣共い細申含置候事、

一 此晩長の木戸別盃致度候間、可參小松家より承候得共、不気色放相断候、尤大久保氏ニて西郷江逢候付相頼置候也、(後略)

一月二十日、久武は十八日に薩摩藩要路の人物達が木戸と話し合った内容等を国元に報告すべく大久保に翌日(二十一日)の帰国を通告し、報告内容の詳細(あくまでも久光の意向から逸脱していない範囲と想定される)を打ち合わせた。久武は、十八日の会談で同盟の方向性は決定したと判断し、京都の情勢(長州処分の決定及び西郷の動向)等を考慮した結果、早々の帰国を断念して、報告を大久保に委ねたと考えられる。結果的に、英国対応等の様々な諸問題も大久保が報告、処理をする流れになった事であろう。そして、おそらく二十一日もしくは二十二日に、龍馬を加えた席で薩摩藩側(小松、西郷)から正式に木戸へ六ヶ条の提示がなされたと推察される。当日、最終的な確認の場において龍馬が証人として同席し、薩摩藩側の最高責任者である小松が決断して会談が成立した事実は、木戸にとっては大変、好都合であった。³³⁾

ところで、久武が二十日夜の木戸の送別会に参加せず、また、その日以降の二日間出勤を控えた(同盟締結の場に立ち会わなかった)理由をどのように捉えるべきだろうか。日記には「不気色(二十日)」「不快(二十一日)」と書か

れてはいるものの、この間に来客対応等もしている事から、極度の体調不良に陥っていたとは考えられない。また、事前に最終的な会談の場には薩摩側藩が必要最低限の人数で臨むとの方針決定がなされていた可能性も想定される。

この点について、久武は久光の「御内論」を伝えるに来た立場上、木戸の送別会や同盟締結の場に参加する気になれなかったとする説がある。この見方で考えると、久武の意向を察した広兼も会談への参加を見送り、全てを筆頭家老の小松の判断に委ねたと見れそうである。そして二十一日の「上京日記」を見ると、「今日谷村・奈良原・黒田嘉右衛門・同了助・大久保氏・得野良介・堀直太郎等出立候付見送候也」とあり、久武は大久保ら帰藩する藩士達を見送っている様子が分かる。この中に奈良原の名前がある事から、久武は同盟の最終的な確認の支障になりそうな久光サイドの藩士を京都から早く送り出そうと考え、それに大久保も協力したともれそうである。「上京日記」に詳細についての記載がないため断言はできないが、久武、小松ら家老達とはかく久光の意向を十分に配慮しながら、同盟締結に向けて細心の注意を払いつつ、行動していたのではあるまいか。そのように考えると、久武が欠勤していた理由もおぼろげながら納得できる点がある。

続けて二十三日の「上京日記」を見ていくと、広兼の動向が分かる記載がある。

二月(正月の誤りか)廿三日 晴曇寒天雪少々降ル

一 毎之通寢覚也、四ツ後出勤、誰も出勤無之候、諏訪氏陽明殿(近衛家)参内、小松家ニハ能見物之由也、御用も無之候付退出、勘兵衛同伴ニて三条通見物、(後略)

この日に広兼は近衛家に参内しているが、この時点で薩長同盟に関する報告がなされた可能性がある。これも、島津家との縁が深い近衛家との関係を考慮した久光への配慮とも考えられよう。さて、ここで興味深いのが、小松は当日出勤せずに能見物をしており、この日以後の行動も久武の「上京日記」から推

察すると、随分ゆつたりと過ごしている様子が窺える事である。同じく久武や広兼らの動向についても緊迫感を感じさせる記載は「上京日記」には見られず、逆に二月六日付で伊地知壯之丞に久武が宛てた書翰内には、「永滞留大屈（退屈）イタシ候」との記載がある。おそらく、一旦、国元への報告の為に帰国した大久保の再上京を待ちながら日々を過ごすしかなかったからではないだろうか。

その大久保の再上京であるが、二月二十一日と二十二日の「上京日記」に記載されているので、以下に引用してみたい。

寅二月廿一日

一 毎之通寢覚、定刻より出勤、諏訪家・西郷同断出勤也、大久保一蔵到着早速出勤候間、御国元一左右一通承候也、此日終日在宿、大かね時分二禮源五右衛門差越參候、ゆる／＼御国許左右も承届候也（後略）

寅 二月廿二日 曇天

一 毎之通寢覚、九ツ過より今日ハ休日故出勤不致、大久保・いち、到着いたし御国元一左右委敷承度申談參候、伊勢殿・西郷・大久保・いち、也、四ツ過時分迄相咄候也、

この日、京都到着後すぐに出勤してきた大久保から、久武は国元の状況を報せる書状を一通受け取った。広兼、西郷も出勤しており、小松はこの時期体調不良で欠勤気味であった。更に久武は同日に上京してきた仁禮源五右衛門からも国元の情勢を聞いている。そして翌二十二日は、休日のため在宿中の久武は大久保、伊地知壯之丞が正午過ぎに訪ねてきたため、久武が国元の情勢を聞きたいと申し入れ、広兼や西郷からも交えて午後十時過ぎまで話をしている事が分かる。この時の大久保や仁禮からの報告から、久武や広兼ら家老達は、久光が薩長会談の概略を容認したと捉え、会談の詳細については小松が責任者として帰国後に報告する流れを決めたと予想される。そして久武の「上京日記」は二

月二十九日付で終わっており、久武が小松や西郷らと共に帰国したのは三月十一日であるが、帰国後も西郷と久光との関係が特に悪化する事はなかった様である。

以上、本章では久武の「上京日記」を中心に薩長同盟締結時の薩摩藩家老及びその周辺の人物達の動向について見てきたが、久武上京の当初の目的は久光名代としての天機伺いであり、更に久光の西郷ら在京藩士への「御内諭」伝達が付随してくるものであった。そこに、長崎における英国との交渉及び木戸の上京による薩長会談への同席等が加わり、家老としての久武の責任はより重きを成した。その中で、同じ家老職の広兼や小松、岩下らとの連携により、英国や長州藩との関係を調整して幕府に対峙する態勢を強化できた事は、薩摩藩が以後の中央政局に臨むにあたっての大きな分岐点になったと言える。

そうした意味で、慶応元年末から翌慶応二年初頭にかけて家老達が果たした役割は決して軽視できないものであり、この事を踏まえた上で慶応三年（一八六七）年以後の家老達の動向について見ていきたい。

三 慶応三年後半期の政局における久武と広兼の動向

前章で見てきたように、慶応二年一月の薩長同盟締結によって薩摩藩の後方からの支持及び協力を取り付けた長州藩は、同年六月に開戦した幕長戦争に勝利し、藩体制の維持に成功した。一方、この敗戦によって更に権威を失墜させた幕府側は、一橋慶喜が徳川宗家の相続、続けて十五代将軍に就任し、年末に最大の理解者であった孝明天皇の急逝という危機はあったものの、薩摩藩との関係構築に努めながら、元治元年以来の有力諸侯を招集した会議開催を目指した。その結果、同年五月に久光と土佐、越前、宇和島の諸侯らを交えた四侯会議が開かれたが、兵庫開港及び長州処分問題を巡り、慶喜と久光ら諸侯との間で意見が分裂、結局、慶喜の政治力の前に会議はなし崩し的に幕府の思惑通り

(兵庫開港・長州処分同時勅許)となった。以後、薩摩藩は武力倒幕に向けて幕府に対し強硬な姿勢をより明らかにし始め、十月には朝廷から「討幕の密勅」を引き出す事に成功する。それと同時に、武力を背景として大政奉還を実現させ、王政復古による新政府樹立を目指す土佐藩の路線にも小松を中心に同調を示し、一旦は無血革命路線が実現するかに見えた。それでは、当該時期に家老達が一体どのような政治的意思をもって政局に臨んでいたかについて、以下、彼等の書翰等から読み取りつつ、考察していく事にしたい。

まず、大政奉還後の政治状況であるが、十一月十二日付で小松が土佐藩執政の後藤象二郎に宛てた書翰内には、薩摩藩主親子(久光・茂久(忠義))が慶喜の判断を肯定的に評価している様子が記載されている。^⑧小松は後藤と共に大政奉還の早期実現に向けて尽力し、実行を決断した慶喜を高く評価したが、久光・忠義親子も同様であった理由は、これにより内乱や諸外国の干渉を未然に防ぐ事ができ、天皇の下に諸侯も参加できる中央政府の樹立が可能であると判断したからだと推察される。そして、小松、西郷、大久保の三名は藩主忠義に出兵上京を要請するために「討幕の密勅」を携えて十月十九日に大坂を出発し、途中、山口で長州藩主親子に拝謁の後、同月二十六日に帰国して久光・忠義親子に京都での状況報告を行った。しかしその後、忠義一行(西郷や当時国元にいた家老の広兼、岩下らも同行)が上京していく中で、小松が体調悪化の為に上京が出来なくなるといふ想定外のアクシデントが起きる。小松は、国元のまゝとめ役の任に当たる久武に上京出来ない無念さを伝えていたが、結果的に京都における実質的な薩摩藩最高責任者であった家老小松の不在によって、中央政局は大きなターニングポイントを迎え、小松や土佐藩が目指した無血革命路線から、西郷ら対幕強硬派の武力倒幕路線が主導権を握る展開となっていた。

まずは、このような状況変化の中で上京した広兼がどのような立ち位置で動いていたかを物語る書翰(慶応三年十一月二十五日付 久武・小松宛)を引用しながら、当該期の家老達の動向について考察していく事にしたい。

(前略) 太守様二茂海陸無御滞去ル廿二日京邸江御光着、猶御機嫌克御供中一同無事致安着候間御安意可被下候、(中略) 十七日に三田尻御着船、翌日御対面の御都合茂宜敷御同慶奉存候、御召之諸侯方茂いまださして御上京も無之尾越位之事御座候、徳川内府公二も虚心彌復古之心底と被聞申候、是迄幕中之旧弊稍反正之方二者為相趣由御座候得共、何分改兼殊更加州肥後藤堂其外両三藩会議相催、幕府之政刑に無之候而者不相濟儀杯之議論茂有之由、刺客之説取々ニて先日者長州藩坂元龍馬杯被殺何分物騒之世態に御座候、(後略)

本書翰は、十一月十三日に軍艦三隻で鹿児島を出発した忠義一行が途中、長州藩の軍港である三田尻に立ち寄り、世子の毛利定広との会談も滞りなく終えて無事に京都に到着した、との報告から始まっている。続いて京都の状況報告であるが、大政奉還後の諸侯招集に応じたのはこの時点で尾張、越前侯など僅かであるものの、政権返上は新政府樹立を目指した慶喜の真意である、との広兼の見方が示されている事は着目すべき点である。更に書翰では、広兼が慶喜の本心を信用しながら佐幕派の諸藩等とは区別して見ている事や、龍馬の暗殺など京都の不安定な世情を国元の小松や久武に伝えている様子が分かる。

さて、それでは先述した慶喜の真意に対する薩摩藩士達の見方であるが、広兼以外にも伊地知正治が大久保に宛てた書翰^⑨で書いている様に、様々な情報分析から在京藩士の中では慶喜への疑念がかなり薄らいでいた様である。

しかし、これまでの政局において何度も慶喜の政治力の前に煮え湯を飲まされてきた西郷や大久保等の対幕強硬派にとっては、簡単に不信感を拭いきれるものではなく、慶喜を新政体から排除すべき方向性を模索していたため、幕府との武力衝突の可能性も一方では徐々に強まっていた。本書翰の書添で、広兼が小松に向けて「御全快早御上京之處くれぐれも奉待候」と書いているが、文面からは調整役としての小松の上京を切に願う広兼の心境がひしひしと伝わってくる。

そして、十二月九日に対幕強硬派の主導による王政復古政変が起こるが、この後の西郷等の動向について伊達宗城の日記（慶応三年十二月二十八日付）⁽³⁰⁾には次のように書かれている。

一 此方云西大兩人討徳主張致候処大幸しらぬ事ニ可有之一心ハ此形勢、御互より致密示、所存承候而ハ如何表向ハ所勞見舞使者にて宜候狼僕も左考居候御案故越帰候ハ、申合使可遣と約候、

この引用部分及び前部の記載を読むと、伊達宗城が土佐の山内容堂に対し、西郷や大久保が王政復古政変後に旧幕府側との武力対決の決意を固めた様子である事を国元の久光が知らないのではないかと伝え、鹿児島への使者の派遣を提案している状況が分かる。西郷や大久保がこのように他藩の人物にも警戒されていたのに対し、広兼が当時の政局をどのように見ていたかについて窺える書翰（慶応三年十二月二十八日付 久武・小松宛）を次に引用したい。

（前略）去ル九口より十一日比迄之次第者、大略御側役方より町便差立候付御承知可有之、四五日方間者無相違事破れニ及そふな勢ヒに御座候処、乍漸一時者相治り候、会桑必死之決策ニ飛かれ幕中過半暴発之憂難取静勢ヒ之処、徳川内府公初め出足ニ成候而鎮撫有之候由、尾越之説得周旋ニ而十三日晚下坂相成内府公丈ハ至極恭順、乍併中以下之処人氣甚六ヶ敷鎮定出来兼候向、（続く）

広兼は、会津藩・桑名藩の暴発を食い止めようとする慶喜に対して共感的な理解を示しており、その見解を久武と小松に伝えている。当時、薩摩藩内では従来出兵反対派（久光二男の久治を筆頭とする）に加えて伊地知正治の様に慶喜を新政府に受け入れようとする動きも起こりつつあった。おそらく、小松もその動きに共鳴していたと考えられ、この時点で小松と西郷ら対幕強硬派との間に若干、政見の違いが生じていた事が予想される。ただし、書翰中に両者の間の対立を想起させる記載はなく、広兼が例え新政府に慶喜を受け入れる事に賛成していたとしても、西郷らと決別する意思は全く無かったと思われる。

その根拠を考えていく上で、先の書翰の続きを引用して見ていきたい。

（前からの続き）先日より伏見江も相応新撰組歩兵等参居奉行所江柵於結嚴重ニ相見得候由、狼藉甚敷尾州田宮惣雲江市中取締兼被仰付候得共、何分行届兼此御方様長州土州芸州江市中巡邏被仰付、御邸人数三小隊丈伏見江被差遣候、土芸ハ伏見巡邏者御断申出候由、つまり血歟出不申候而ハ治り者附不申問敷、依而至極大事之御場合御邸者勿論御参内等之節能々一統心於用候様相達心配仕事御座候、（後略）

書添

昨日者於日御門前調練備天覽候此御方様兵隊小銃拾七小隊大砲一隊人数千六百人位手明之人計長州五百人計大隊運動土州芸州者少人数ニて御座候、御国之調練者誠ニ自慢なものニ御座候、（後略）

伏見方面において、新撰組等の旧幕府側が不穏な動きを見せている事に対し、尾張藩の田宮惣雲に市中取締の命が下ったが徹底せず、薩長両藩が巡邏の兵を派遣する中で、王政復古政変時の協力藩であった土佐、芸州両藩が巡邏を断っている状況を広兼が怪訝そうに伝えている。また、書添においても、御所門前の軍事調練の際に土芸両藩が少人数の参加であった事など、旧幕府側に対する対決姿勢を巡り薩摩藩との温度差が生じている様子が読み取れる。自藩の調練について広兼は、「御国之調練者誠ニ自慢なものニ御座候」と自画自賛している事から、軍事行動について完全否定の考え方はなかったと言えよう。その点で武力行使をも厭わない西郷等との間に大きな溝は出来なかったと思われるが、その一方で慶喜との協調及び無血革命の方向性も脳裏にあったと推察され、家老として藩の重責を担う必要があった広兼は難しい立場に置かれていたのではないだろうか。次に、先の書翰と同じ日付で広兼が国元の家老達に送った報告⁽³¹⁾を見てみたい。

伏見表狼藉者有之趣付、巡邏鎮定有之候様、別紙之通從御所被仰渡候付、去ル二十一日七ツ時分ヨリ、三番隊并高岡一番隊・白砲手半隊被差出、私

領式小隊之儀モ、被差出置候得共、右丈ヶハ翌二十二日引取相成、同日四番隊一組被差出、于今出張相成居、只今ニテハ先平穩之向ニテ、何モ異変之儀無之候、御留守居首尾書相添、此段申越候条中将様可被達 御聴候、以上

卯十二月二十八日

島津図書 殿 島津伊勢

桂右衛門 殿

小松帯刀 殿

川上龍衛 殿

町田内膳 殿

(後略)

この時期の京都における家老の責任的立場は、本来、担当すべきであった小松が病状悪化のために上京出来なかった事から、広兼や岩下方平（西郷、大久保らと共に新政府の参与に任命される）らが担っていた。そして、国元では倒幕出兵反対派の島津図書（久治）が家老首座の地位にあり、対幕強硬派はあくまでも少数派であった。本史料からは、広兼が在京家老の責任者として伏見方面の近況について中将様（久光）や久治への配慮を意識しつつ、報告義務を果たそうとしている姿勢が読み取れる。

さて、王政復古政変以降、西郷ら対幕強硬派が旧幕府側への圧力を強めていく中、先述した様に慶喜は反撃を主張する幕臣や会津・桑名藩兵を抑えつつ、彼等を引き連れて大坂に下った。その行動が、新政府に慶喜を迎え入れようとする土佐藩や越前藩の松平春嶽などに評価された事で、対幕強硬派が主導権を握っていた薩摩藩は次第に孤立を深めていく。苦境にあった西郷が、広兼の国元への近況報告と同一日付で久光側近の蓑田伝兵衛に宛てた書翰^④の中で小松の上京を強く求めているが、その記載からは当時の西郷の苛立ちや焦燥が切迫感をもって伝わってくる。それだけ西郷は追い詰められており、調整役の家老である小松の不在が薩摩藩の政局運営に大きく影響してきた結果であった。

ところが周知の如く、旧幕府や庄内藩等によって慶応三年十二月二十五日に江戸薩摩藩邸の焼き討ち^⑤が行われると、状況は大きく一変する。以下、この事件の報を受けた時（大晦日前後か）の藩の状況を記した市来四郎の自叙伝^⑥を見ながら、この時の広兼ら在京家老達の動向について考察してみたい。

（前略）十二月廿五日、幕府は庄内其他の各藩に命し、芝の藩邸を焼き、廷吏浪士を殺傷す、邸内浮浪士を潜匿し、市内遠近各地を騒かしたるか故なり、此挙京都に聞ゆ、本藩戦意を決す、翌年一月三日の開戦を見たるは、此挙の発因に依れり（中略）当時藩庁に於ては、島津圖書君国老上席にありて、桂右衛門と事を取れり（中略）桂独り西郷一輩の為に、百万之を防遏せり、（後略）

明治期に島津家の歴史編さん事業に携わった市来四郎は、本記載において薩摩藩が全体として対幕戦を決意したのは、江戸藩邸焼き討ち事件の報が京都に伝わった時点だと指摘している。この事件によって政治的に退路を断たれた薩摩藩はまさに背水の陣で対幕戦に臨んでいくが、この時期の広兼ら在京家老達に求められた決断や覚悟は彼等にとっては相当な重圧であったと予想できる。おそらく、藩家老として第一に考えたのは中世以来連綿と続いてきた名門島津家の維持であり、同様の立場で第一次長州征討の際に責任を負って処分を受けた長州藩の三家老についても脳裏をよぎった事であろう。結局、この時点で出兵反対派の島津久治も止むを得ず開戦を決断したと思われる、自らも後に会津に出征している^⑦。なお、市来が「桂独り西郷一輩の為に、百万之を防遏せり」と書いている事から、久武が国元において西郷を支持する唯一の存在であった状況も分かり、家老達の中で最も早く対幕戦を現実的に想定して臨んでいたのは久武であったと考えられる。

そして、慶応四（一八六八）年一月三日、大坂から京都へ進軍してきた旧幕府軍一万五千と、薩摩・長州藩兵を主力とする新政府軍五千が鳥羽・伏見で激突して戊辰戦争が開戦、新政府軍が緒戦に勝利した事で武力倒幕は大きく前進

していくが、その状況を広兼は同年一月五日付の書翰で国元の家老達に報告している⁽⁴⁵⁾。その際に広兼は、新政府軍の勝利に加えて味方の戦死者が少なかった戦況も同時に久光に伝えてくれるように依頼している事が分かり、在京家老の責任的立場である広兼が、内戦を忌避していた久光に配慮している様子が窺える。ほぼ同時期に西郷や大久保が国元に報告した内容が、戦勝について率直に喜びと安心感を伝えているのと比較すると対照的な面が見られ、彼等の置かれた立場の差異を考える上で中々興味深いところである。

おわりに

以上、様々な史料から、幕末の政局における慶応期の桂久武と島津広兼を中心とした薩摩藩家老の動向について見てきたが、両者の役割を時期毎に区分して整理していくと、次のようにまとめられる。

まず、慶応元年は、藩の富国強兵路線の推進及び割拠体制構築に向けての種々の問題にそれぞれの立場で対応していた様子が、久武に宛てられた広兼の書翰から窺う事が出来た。続いて、慶応二年初頭では、久光の意を汲みながら薩長同盟の締結を円滑に進めていく上での潤滑油的な働きを両者は成したが、木戸との間に内容の合意を実現させて同盟の最終的な方向性を決定したのは、京都における家老の最高責任者である小松であった。但し、それを脇からサポートした両者の役割の重要性も決して看過できないところである。更に、幕末の最終段階である慶応三年末期においては、小松の無血革命路線に同調して慶喜の動向に理解を示しつつも、西郷ら対幕強硬路線とも関係を保ち続け、時勢に柔軟な対応をしながら藩が難局を乗り切れる方向に舵取りをして、武力倒幕を推進させた。

彼らが行った現実的かつ冷静な政治判断こそが武力倒幕の成功及び島津家（薩摩藩）の維持に大きな貢献をし、それによって藩の家老としての責務を果

たす事が出来たと考えられる。

幕末期という先行きが不透明な時期において、両者を含めた薩摩藩の家老達は、藩主（厳密には久光）から任された「権力」の責任をとにかく一心に果たす事を念頭に動いていたのであり、「藩」という自分達の帰属する組織に対する意識については、下級武士層出身の西郷らと大きな差異があったのではないだろうか。そのような中で西郷ら対幕強硬路線と協調しつつ、藩を幕末の最終段階まで分裂させなかった家老達の力量や功績はより一層、評価されるべきであらう。

最後に今後の課題であるが、筆者としては幕末期の薩摩藩家老をこれまでの様に西郷、大久保の脇役として見るのではなく、様々な歴史的事象や人物達を通して個々の家老が政局において果たした役割を再検証していく必要があると強く感じている。例えば、島津久治ら武力倒幕出兵反対派の動向についても単に否定的に見るのではなく、その詳細を更に深く考察していくべきである。そして、本稿で取り上げた人物達を含めた家老全体の動向を注視し、より多面的・多角的な見方で薩摩藩幕末維新政治史の研究を推進していく事が重要且つ喫緊の課題であると考えている⁽⁴⁶⁾。

註

(1) この点については、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）一五一頁―一五四頁の中での指摘を参考にしている。

(2) 高橋裕文「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」〔大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書第十六冊 もうひとつの明治維新―幕末史の再検討―〕有志舎、二〇〇六年。高橋氏は、慶応三年の時期に薩摩藩が一貫して武力倒幕路線を貫いていた訳ではなかった事を様々な史料を用い

て論じている。

- (3) 当書翰は未刊行史料であり、今回の翻刻及び掲載にあたっては、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本『桂家文書之内 島津廣兼書翰(十七通)全』(黎明館保管史料の写しと思われる。)も参考にした。なお、判読しにくい文字は□としてある。
- (4) 『鹿児島県史料集(二十六) 桂久武日記』(鹿児島県立図書館、一九八六年) 解題の五頁には、「同年(元治元年)十一月には御家老職・加判役で御用部屋詰、御勝手方掛を勤め藩政の中枢に進出」とある事から、実際の業務には正式な就任の前年(元治元年)から携わっていたと思われる。
- (5) 林匡「薩摩藩家老の系譜」(『黎明館調査研究報告』第27集、二〇一五年) 九頁～十四頁の記述を参照
- (6) 『鹿児島県史料 市来四郎史料一 玉里島津家史料補遺』(鹿児島県、二〇一九年) 一四九頁の「市来四郎日記(四) 壬戌又之八月廿九日」条に、広兼の処分理由及び人物評価についての記載がある。この中で市来は広兼を非常に高く評価し(「此人ハ随分才器も有之、器量飽まで有之、御用向も公平に取扱、人望も不少人ニ而候」)、その処分理由を不当な人事によるものとしている。市来の歴史家としての鑑識眼については、前掲の家近氏著書などでも取り上げられており、広兼の人物像を捉えていく上で参考になる史料である。
- (7) 『黒田嘉右衛門ヨリ久光公へノ上書』(『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』(鹿児島県、一九九四年) No. 一一四七において、薩摩藩士の黒田嘉右衛門(清綱)が久光に示唆している。
- (8) 豊廣優貴「幕末期薩摩藩の軍事力強化と諸郷・郷士」(『明治維新一五〇周年若手研究者育成事業 研究成果報告書』鹿児島県、二〇一九年) 四十二頁～四十七頁。なお、薩長同盟締結前後の一年間、京都警備のため上京した伊集院郷士の上村得三清緝の日記からは、現地における郷士の

訓練の様子などの詳細が読み取れる。(鹿児島県史料拾遺30 塩満郁夫編

- 『伊集院郷(二) 上村得三清緝の道中日記 上村得三清緝の長屋詰諸覚留 上村得三清緝の餞別帳』(鹿児島県史料拾遺) 刊行会、二〇一九年)
- (9) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』(鹿児島県、一九九六年) No. 一六七八
- (10) 新納は五代友厚や通事の堀孝之らと共に、グラスゴウの造船会社であるランドルフ・エルダー社を訪問して得た図面を十三枚、国元に送付した。当資料は現在、「玉里島津家資料」として黎明館に収蔵されている。(書翰は、『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』(鹿児島県、一九九四年) No. 一一〇八。)
- (11) 琉球通宝の流通状況に関しては、徳永和喜『偽金づくりと明治維新』(新人物往来社、二〇一〇年)を参照。特に、本稿二頁で触れた三井家との連携についての詳細が二〇三頁～二〇八頁において整理されており、書翰の内容から、広兼も深く関与していたと見てとれそうである。
- (12) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局』(体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変) 一三五頁～一三七頁
- (13) 崎山健文「江戸薩摩藩邸大奥引き払いと西郷隆盛」(『黎明館だより Vol.34 No.2』鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一六年)
- (14) 『西郷隆盛全集 第二巻』(大和書房、一九七七年) 八十七頁～九十三頁
- (15) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No. 一四四五。この「島津久光宛伊達宗城書翰 慶応元年十二月十七日付」については、拙稿「企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」展示資料に関する調査報告」(『黎明館調査研究報告』第29集、二〇一七年) 八十二頁の註において説明を補足している。
- (16) 前掲『鹿児島県史料集(二十六) 桂久武日記』一六頁～二九頁
- (17) 高村直助『小松帯刀』(吉川弘文館、二〇一二年) 一二二頁

- (18) 有松しづよ「桂久武」上京日記」(自慶応元年十二月六日至同二年二月二十九日) 訳注稿」(『志學館大学人間関係学部研究紀要』Vol.39、二〇一八年) 二〇八頁
- (19) 芳即正「島津久光と明治維新—久光はなぜ、討幕を決意したか—」(新人物往来社、二〇〇二年) 一六三頁
- (20) 本事件は、長州藩が購入の予約をした木製蒸気船(乙丑丸)の所属を巡って、当該時期に薩長両藩の間で生じていた問題である。
- (21) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局—体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変—』一三五頁において家近氏は、「島津求馬等(側役)宛桂久武書翰 推定慶応元年十二月二十六日付」(『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一四四八)内の記載を元に、推論を下している。
- (22) 久住真也『王政復古 天皇と將軍の明治維新』(講談社、二〇一八年) 一六九頁において久住氏は、慶応元年当時の宮中参内における諸藩士ら陪臣の地位向上に関して論じているが、幕威の低下に伴う状況の中の久武の参内について、その内容や意義を更に検討する余地があると思われる。
- (23) 前掲の拙稿「企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」展示資料に関する調査報告」七十八頁
- (24) 平成二十八年年度黎明館講演会における家近良樹氏の講演内容
- (25) 町田明広「第一次長州征伐における薩摩藩—西郷吉之助の動向を中心に—」(『神田外語大学日本研究所紀要』第8号、二〇一六年) 二十三頁—二十五頁
- (26) この時期の奈良原の存在意義及び動向に関しては、歴史研究家の新出高久氏と粒山樹氏より御示唆をいただいた。
- (27) 二〇一九年、歴史研究家の原田良子氏によって、「近衛家別邸御花畑」から京都内の大久保利通邸に移築したとされる茶室「有待庵」が確認された。薩長同盟締結との関連について、今後の研究進展が待たれるところである。
- (28) 研究の発端となったのは、青山忠正『明治維新と国家形成』(吉川弘文館、二〇〇〇年)であり、当史料はそれ以降、様々な論文等で使用されている。
- (29) 鳥取県立博物館蔵。なお、翻刻は、『坂本龍馬没後一五〇年記念特別展 龍馬が見た下関』(下関市立歴史博物館、二〇一七年) 十五頁を参照。
- (30) 『坂本龍馬宛木戸孝允書翰』慶応二年一月二十三日付。『木戸孝允文書二』(日本史籍協会叢書、一九七二年) 一三八頁—一三九頁
- (31) 町田明広『薩長同盟論—幕末史の再構築』(人文書院、二〇一八年) 二四六頁
- (32) 宮地正人『歴史のなかの「夜明け前」 平田国学の幕末維新』(吉川弘文館、二〇一五年) 一三八頁—一三九頁。宮地氏は本書において、京都の染物商であった池村久兵衛邦則が同志である中津川宿本陣の市岡股政や間秀矩らの国学者に宛てて出した手紙(慶応元年十二月二十六日付)を紹介している。この手紙には、秘かに太宰府に赴き十二月二十四日に帰京した元水戸藩士二名が、黒田から得た情報として池村に語った内容(本文中に記載)が記されている。
- (33) 木戸が、龍馬を証人として薩摩藩家老の代表である小松との直接交渉を成功させた事は、以後の長州藩内における自らの政治的地位の向上に大いに役立ち、この時をもって名実共に藩の指導者として認められたと考える。
- (34) 新出高久「慶応期西郷隆盛寓居の検討から「薩長同盟論」にいたる」(『靈山歴史館紀要』第二十四号、二〇一九年) 九十七頁—九十八頁
- (35) 『鹿児島県史料集(三〇) 桂久武書翰』(鹿児島県立図書館、一九九〇年) 十九頁—二十一頁
- (36) 『鹿児島県史料 忠義公史料四』(鹿児島県、一九七七年) No.五五五
- (37) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』(鹿児島県、一九九六年) No.一六九五

(38) 慶応三年十一月付の書翰の中で、伊地知は大久保に「於朝廷將軍辭職を御聞濟ニ而徳川内大臣諸侯之上席ニ而被召置候様可有御座哉」(立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書 一』吉川弘文館、一九六五年六〇頁～六四頁)と伝えているが、藩の軍事参謀的な立場である伊地知の意見である事は注目すべき点と考える。

(39) 『伊達宗城在京日記』(日本史籍協会叢書、一九七二年)六一〇頁

(40) 『鹿児島県史料 忠義公史料四』No.六三〇

(41) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』No.一七〇二

(42) 薩摩藩士の伊牟田尚平らが浪士隊を指揮して江戸市内及び関東一円を攪乱した事に対して、市中取締役の庄内藩が中心となり起きた事件であるが、近年はこの攪乱工作が西郷等の指示ではなく、現地指導者の判断で行われたとする説が有力である。(『西郷隆盛全集 第二巻』所収 養田伝兵衛宛西郷隆盛書翰慶応四年一月一日付 三三七頁～三四一頁。家近氏も前掲書の三一二頁～三三三頁でこの件について論じている。)

(43) 「市来四郎自叙伝(附録)九」(『鹿児島県史料 忠義公史料七』(鹿児島県、一九八〇年)九八二頁

(44) 島津久治は本文で前述した様に久光の二男であり、宮之城私領主の久宝の養嗣子となった。慶応二年に家老首座となり、翌年の武力倒幕の動きに強く反対した。明治二(一八六九)年の藩政改革の際に、出兵に反対した事を詰問され、家老を辞職、その三年後の明治五(一八七二)年に急死した。ピストルによる自殺とも伝えられるが、家老辞職問題との関係は不明である。

(45) 「伏見・鳥羽戦争ノ情況ヲ藩老ニ通知ス」(『鹿児島県史料 忠義公史料四』No.七二六

(46) 西郷は、慶応四年一月十日付で久武宛に戦況を伝えているが、その文面には「三日より六日迄之連戦一步も不退、少々之敗もなく勝どほし之軍

ハ未曾有之戦ニ御座候」とあり、高揚している心情を読み取る事が出来る。

(『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』No.一七二二) また、大久保も同月五日付書翰で緒戦の勝利を伝えているが、「初戦之処御大事ニ候得は、実ハ握掌イタシ居候」とあり、冷静な大久保が感情を露わにしている様子が窺える。(『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』No.一七二七)

(47) 原口泉『維新の系譜 家に、国に、命を尽くした薩摩藩・三人の功臣たち』(グラフィック社、二〇〇八年)二二九頁の記述を参照

(48) 今後は幕末期だけでなく、西南戦争に至るまでの明治期における久武を中心とした旧家老クラスの人々の動向について考察し、廃藩置県の時期及び明治十(一八七七)年前後の鹿児島における彼等の立ち位置などについても研究を深めていきたいと考える。

(いちむら つつじ 本館調査史料室学芸専門員)